日本IT書紀

072 火炎

04 含牙篇
巻之九 修羅

佃 均

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。

第七十二

火炎

一

一九四四年六月にサイパン島守備隊が連合国軍に降り、七月にグアム島が陥ちた。十月にはフィリピンに連合国軍の上陸が始まり、太平洋戦争の次の戦場は中部太平洋では硫黄島、南西諸島では沖縄になることがはっきりした。

大本営はそこで西南諸島防衛のため、第十軍幕下に第三十二軍を編成して沖縄の首里にその本営を置いた。とともに満州の関東軍から第九師団と第二十四師団を、中国大陸から第六十二師団と第四十四旅団および、第五砲兵団を転進させ、総兵力十万を沖縄諸島に配備した。司令官は牛島満である。

うち第九師団は関東軍の精鋭、第五砲兵団は大砲を専門とする重量感のある兵団であって、特に第五砲兵団は日本陸軍にあってきわめて特殊な戦闘集団といってよかった。

第五砲兵団を構成していたのは野戦重砲兵二個聯隊、重砲兵一個聯隊、独立重砲兵一個大隊、臼砲一個聯隊、迫撃砲四個大隊、野戦高射砲四個大隊、独立速射砲三個大隊などで、径七十五ミリ以上の火砲計四百門以上という陣容である。

戦車が二十七両しかないこと、航空兵力が欠乏していることなど不備を数え上げれば切がなかった。十万の兵と四百門の火砲というのは、この時点で大本営が用意できた最大の陣容というほかなかった。海洋決戦が不可である以上、連合国軍を沖縄本島に引き付けるしかない。

この牛島の作戦はもろくも崩れた。

四十四年九月にアメリカ軍のフィリピン上陸が開始されると、大本営は沖縄の第九師団を台湾に転出させることを決めた。台湾を防衛しなければならない、というのだが、アメリカ軍は陸軍第八軍、第六軍の計十二個師団・四十万人と総艦数七十を超える太平洋艦隊第三十八任務部隊を当てているのである。

にもかかわらず兵力の四分の一を割かれては沖縄防衛作戦の根本が崩れる。ばかりでなく本土防衛構想そのものが崩壊する。

翌四五年一月二十三日、牛島のもとに、姫路から第八十四師団を増派する、という報せが届いた。新兵ばかりだが、戦力には違いなかった。ところが同日の夕刻、

――第八十四師団の増派は中止。

ということになった。

――海上輸送の安全が確保されていない。

というのが理由だった。

牛島は唸った。

沖縄住民による決戦部隊が編成された背景には、以上のような事情があった。

まず満十七歳から四十五歳までの男子約二万五千人が、現地徴兵として第三十八軍に編入された。次いで男子中学生に通信員教育が、女子生徒に看護婦教育が行われ、半ば強制的に部隊が編成されていった。

男子中等学校上級生一千六百八十五人による「鉄血勤皇隊」（戦死七百三十二人）、女子中等学校上級生五百四十三人の女子挺身隊（戦死二百四十九人）がそれである。うち沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の生徒二百二十二人による「ひめゆり部隊」の悲劇は、こんにちまで語り継がれている。

四月一日、アメリカ軍が沖縄島に上陸を開始した。作戦は「アイスバーグ」と名付けられた。アメリカ第五艦隊、イギリス機動部隊を合せた総兵力は正面主力十八万三千、後詰五十四万八千人、動員された艦船は一千三百十七隻、艦載機は一千七百二十七機だったと記録されている。対する日本軍守備隊は陸軍七万七千百九十九人と、直前に配備された海軍陸兵隊八千の計八万四千六百である。

戦いはアメリカ軍による嘉手納への爆撃と沖合いからの艦砲射撃で始まった。午前九時からの上陸作戦は日本軍守備隊が手薄だったためにたいした戦いもないうち、中、北の両航空基地を確保することができた。ただちにブルドーザーが大地を拓き、そこに鉄の板が敷き詰められ、大型輸送機が頻繁に往復した。その日のうちに六万の将兵と、戦車三百九十両などの重火器、トラック、食糧、医療部隊などが進出した。

同月六日、日本の連合艦隊は「菊水作戦」を発令した。戦艦「大和」が広島県徳山港を出港した。以下、軽巡洋艦「矢矧」、駆逐艦「冬月」「涼月」「磯風」「浜風」「雪風」「朝霜」「初霜」「霞」で編成する日本海軍最後の艦隊だった。

大和が沈没した四月七日、アメリカ陸兵が南進を開始した。

十二日、第六十二師団がアメリカ軍の前に立ちはだかった。しかし同師団はアメリカ軍の圧倒的な火砲によって損失を重ね、二十五日、ついに撤退した。

二十九日、天長節（明治天皇の誕生日）の日、牛島はそれまでの持久戦の方針を一転し、嘉手納の航空基地奪回を

図る攻勢に出た。大本営をはじめ上層の第十方面軍、第八飛行師団、海軍などから牛島に宛てて航空基地奪還のための「攻勢要望電報」が相次いで届いていた。

五月四日、反攻作戦が決行された。第五砲兵団が七十五ミリ榴弾砲一万発をアメリカ軍陣地に打ち込む一方、第二十四師団、船舶工兵で組織する第二十三、第二十六聯隊が左右から前進を始めたが、アメリカ軍の猛反撃にあって諸部隊は損失を重ねていった。

翌五日十八時、作戦中止。

同月三十日、牛島は第三十二軍本営を首里から摩文仁八九高地に移すことを決めた。

那覇西方の守備に就いていたのは海軍陸戦隊八千である。実態は基地設営隊や航空隊整備要員などが半数を占め、陸戦の訓練を受けていたのは三千人に過ぎなかった。しかも小銃は五人に一丁しかなかった。

ここには六月四日、アメリカ軍が上陸した。海軍陸戦隊は航空機から外した機銃や手榴弾で戦ったが、二日後に完全に包囲された。包囲網がじりじりと狭められる中で肉弾戦が展開され、六月十二日に立って戦うことができたのは二百七十人に足りなかった。翌十三日午前一時過ぎ、玉砕。

摩文仁に埋伏した日本軍は正規兵力の八五％を失っていた。小銃は規定の五分の一、火砲は半分が失われた。にも増して五月四、五の両日に行われた航空基地奪回の反攻で多くの指揮官が斃れていた。アメリカ陸軍第七師団が迫り、重戦車が登場すると、日本軍は夜間に奇襲的な攻撃を行うほか手立てがなくなった。

六月二十二日、第六十二師団長・中将藤岡武雄、自決。

二十三日、第三十二軍司令官・中将牛島満自決。

三十日、第二十四師団長・中将雨宮巽自決。

二

日本軍は航空機二千五百七十一機を繰り出して沖縄の守備隊を支援したが、六月二十三日に守備隊が壊滅した。サイパン島の激闘を境に、硫黄島、東京大空襲、沖縄上陸と、アメリカ軍は一般市民に対する無差別攻撃を一顧だにしなくなっていた。

そのために二十一万人もの沖縄の住民が犠牲になった。

避難民が籠もる洞窟に手榴弾や催涙弾を投げ入れ、逃げ出てきたところを機銃で掃射した。あるいは洞窟の上から火炎放射器を放つ「馬乗り」と呼ぶ戦法が編み出された。船が海を埋め、空を戦闘機が覆い、陸に鉄の雨が降り、血の川が流れた。

それでもなお大本営参謀本部は戦争の継続を計画した。

本土防衛は「本土決戦」に変わった。

軍として総兵員四十万人のほか、六十五歳以下の男子と四十五歳以下の女子による「国民義勇隊」、四十歳以下の女子による「国民戦闘隊」を編成し、ゲリラ戦を展開するという計画である。国民を総動員しての臨戦態勢だったが、それぞれに手渡す武器がなかった。

日清・日露のころの単発先込め式歩兵銃、家伝の刀剣を手にしているのはマシなほうだった。軍が考えたのは竹槍や長鉈、捕り物用の指股などだった。日の丸の鉢巻を締め、「エイッ」の掛け声で一斉に青竹を突き出しても、上空に飛来するB―29ばかりはどうにもしようがなかった。

こうした武器――というより、武器として使うことも可能な道具――の性能について参謀本部が示したのは、「射程距離はおおむね三～四十メートル、命中率は五〇％」だった。

当たるも八卦、当たらぬも八卦みたいなもので、アメリカ軍の機械力の前に出たとたん、たちどころになぎ倒されること請け合いであった。それを見て、ときの首相鈴木貫太郎は「これはひどい」と呟いたと伝えられる。

そうこうしているうち、アメリカの工作船は日本の沖合いを悠々と遊弋して機雷を敷設していった。戦闘機は連日のように漁村の船舶を無差別に爆撃した。星のマークを付けた航空機は百メートル以下にまで高度を下げ、機銃を乱射して市民を殺戮した。

――日本に非戦闘員は存在しないものと心得よ。

という教唆があったといわれている。市民が殺戮されるのを見ても、軍は何もできなかった。

一九四五年七月。

この時点で日本軍の組織だった戦闘が行われていたのは、沖縄本島の南方、宮古・八重山群島である。ここには同年六月、陸軍一万三千の部隊が上陸し、航空基地を作り陣地を築いて徹底抗戦の構えを見せていた。日本本土（九州）への上陸を企図していたマッカーサー指揮のアメリカ陸軍第八軍は最初、宮古・八重山群島を立ち枯れさせる方針だったが、

――後背の憂いは除去しておくべきである。

という意見に従って連日の空爆と艦砲射撃が行われた。

宮古・八重山群島はかつて琉球王国の支配下にあったものの、やや海浪を隔てていたため半ば独立のかたちだった。加えて上陸してきた日本軍の兵士が島民の食糧を奪い婦女子に暴行を働いた。ために島の住民は日本軍に反感を持った。また連合国軍は出血を避けて無理な戦闘を行わなかった。このため沖縄本島ほどの悲惨な事件は少なかった。

八月十七日に沖縄本島から陸軍の伝令がきて、守備隊に敗戦を伝えた。同月二十五日、武装解除。

余談だが、宮古・八重島群島の住民は、武装解除後の旧日本兵による乱暴狼藉から生活を守るために「自警団」を組織した。その指導者的存在だった登野城地区青年団の団長・宮城光雄と副団長・豊川善亮は、

――日本から独立しようではないか。

と話し合った。

二人は大川地区の青年団長・本盛茂、石垣地区の青年団長・内原英昇の賛同を得、かつ南部琉球地区軍政長官であるジョン・デイル・プライス海軍少将の同意を得て、十二月十五日、石垣島の「八重山館」という映画館で郡民大会を開いた。

館内は熱気に包まれ、屋外に人があふれた。その中で「共和国」の樹立が宣言され、「八重山共和国」がここに誕生した。

元県会議員で小学校の校長だった宮良長詳（長義とも）を大統領に選出し、第一に食糧の確保と安定供給、第二にマラリアの撲滅、第三に治安の回復、第四に財源の確保――などを決定した。しかし八日後の十二月二十三日、沖縄軍政当局からの通達で琉球政府に編入されてしまった――という逸話がある。

三

ともあれ一九四五年。

その七月二十六日未明のことである。

マリアナ諸島サイパン島のアメリカ軍テニアン基地から三機のB―29爆撃機がひっそり離陸した。この時点でアメリカ軍は、サイパン島の日本軍守備隊を壊滅させ、護衛の戦闘機をつけずに爆撃機を発進させることが珍しくなくなっていた。

テニアン基地を発進した三機の大型爆撃機は、空襲警報が鳴り響く快晴の仙台市上空をゆうゆうと飛び去り、日本時間の午前八時二十分過ぎ、新潟県と福島県の県境にある小さな集落にさしかかった。眼下に川の流れが白く光り、操縦席の前方に二つの山塊が見え始めた。

百人一首に、猿丸という大夫が詠んだ歌が入っている。

おくやまにもみじふみわけなく鹿の
こゑきくときぞ秋はかなしき

この歌を詠んだのが、この町の奥山に流れる「実川」という渓流のほとりだった、という。実川は「さねがわ」と

読み、町の名を「鹿瀬」という。
　このとき、山の中腹に開墾された段々畑で、町の住民と外国人――イギリス、アメリカ、カナダの捕虜――たちが共同で農作業にいそしんでいた。捕虜は敵なのだから厳しく監視しなければならなかったのだが、純朴な住民たちは遠来の外国人たちと仲良くやっていこうと考えていた。
　その町には、ドイツ人技師が設計した、当時、国内で最大規模の水力発電所と、化学肥料の工場があった。大本営はこの施設を空襲から守るため、ほど近くにアメリカ兵の捕虜収容所を設けていた。味方の捕虜が大勢いる町に爆弾を落としたりしないだろう、と考えたのだ。
　見たこともない大きな飛行機を発見した町民は大騒ぎになり、連合軍の捕虜たちは被っていた帽子を手にとって、上空に向かって振った。銀色の機体は、向かいの山の上空八千四百メートルで反時計回り――つまり機首を左に――旋回し、やや高度を下げた。と、その機体の腹部が開いて、大きな爆弾が落とされた。町民はパニックに陥った。
「爆弾が投げ出された瞬間に、ガランガランという音がしたっけね」
　と、その町の古老は言う。
　ガランガランは落下速度を調整するための回転尾翼の音だった。
「お尻に落下傘みてぇなモンがついとったな」
　この目撃証言は正しかった。
　爆弾は落下傘のために横に流され始めた。
「アアッ」
　悲鳴に近い声が上がった。
　爆弾が流されながら落下するその先には小高い丘があって、その丘を越えたところに小学校があった。学校には一年生から六年生まで七百人以上の子どもたちがいて、一時限の授業が始まったばかりだった。警報を鳴らす間もなかった。
　幸いにも爆弾は小学校の手前の丘に着地して爆発した。TNT火薬が岩を砕き、そのかたまりは杉の木立をへし折って山の斜面を転げ落ち、地面を削った。破裂した爆弾の破片と小石が混ざった飛礫が人々に襲いかかった。このために何人かが額から血を流した。
　小学校では、なにか異常を感知した教員が、「避難！」と叫んだ。
　子どもたちは日ごろの訓練どおり、机の下にもぐりこみ防空頭巾を着用した。瓦の屋根と木造の校舎に小石の飛礫が当たって激しい音を立て、ガラスが割れた。怪我人は出なかった。
　大音響が鳴り止んだとき、丘には爆弾が当たった部分だ

け、薄茶色の地肌がのぞいていた。数時間後、複葉の赤トンボが飛来し、上空から写真を撮影した。

アメリカの爆撃機は都市や港湾を空襲した帰路、残った爆弾を「ついで」に落としていくことがあった。その場合でも、彼らは工場や港湾にねらいをつけた。ところが今回は人家も道路もない山の中である。しかも落としたのは一個の爆弾だった。赤トンボの操縦士は首を傾げた。

このことは正規のルートで大本営に伝えられた。ものすごく大きくて落下傘が付いていたということに、わずかに注意が払われた。だが、人口が数千人にも満たない山奥の小さな町であるし、死者も出ていない。要するに「取るに足りないこと」だった。

実をいうと、この三機はアメリカ軍が「パンプキン作戦」と呼んだ新型爆弾を投下する予行演習だった。一機は爆弾投下機、一機は観測機、一機は写真撮影機だった。演習は「成功」と評価された。このような模擬爆弾の投下は、戦後公開されたアメリカ軍の機密資料によると、前後十六回（一説に三十回以上）行われていた。

アメリカ軍は新型爆弾を投下する候補地として、札幌、仙台、新潟、京都、大阪、広島、小倉、長崎などを想定していた。投下演習は、それぞれの都市に向けたものだったと想像していい。

それから二週間後、本物が広島に投下された。

「リトル・ボーイ」と名づけられたその爆弾が市中心部の上空五百七十メートルで爆発した瞬間、厚い鋼板に密閉されていたウランに化学反応が促され、ＴＮＴ火薬二万トンに相当する破壊力と摂氏三万度の光熱が発生した。

その光熱は秒速四十五メートルの猛烈な強風によって運ばれ、六千度まで低下した熱が市民二十万人の命を瞬時にして奪った。続いて九日、長崎にも新型爆弾が投下され八万人が死傷した。

新潟の山奥に原爆の模擬爆弾が落とされた話は、筆者が七歳から十二歳まで住み暮らした町の物語として、同町出身の研究家・沖田信悦が語っている。五十年以上を経た現在、模擬爆弾がそぎ落とした山の崖は緑に覆われ、何ごともなかったかのように装っている。

語る人も次々に鬼籍に入り、記憶は薄れつつある。それで、あえてそのこと書いた。

四

新型爆弾とは、いうまでもなく原子爆弾である。日本軍は八月七日に広島に調査団を派遣し、原子爆弾が使われたことを察知したが、国民には知らせなかった。長崎に再び

きのこ雲が発生したとき、それを遠方から目撃した本土防衛軍の兵士たちは、歓喜の声を上げさえもした。

――研究所が新型爆弾を完成した。

という情報が流れていたためだった。このことはのちに栃木県計算センター（のち「ＴＫＣ」と改称）を創業した飯塚毅が陸軍見習士官として熊本県田原坂に駐在していた四五年八月九日の記憶として　語っている。

だが、それはまったくのデマだった。

なぜアメリカは原爆を使ったか、という疑問に対して、

「ソ連が参戦する意思を示したためである」

という説明がなされる。大統領トルーマンは少しでも早く、アメリカの力で日本を降伏させ、戦後体制をアメリカ主導に導こうと考えた、というのである。

戦後になってアメリカ陸軍長官・スチムソンは

「原爆投下の目的は満州に侵攻し始めたロシアが日本本土に到達する前に、できるだけ早く降伏を実現することであった」

と述べ、国務長官バーンズは

「原爆は、日本を打ち破るために必要なのでなく、ソ連を最もコントロールしやすくするためだった」

と証言している。

「生体実験ではないか」

という指摘もある。

事実、アメリカ、イギリス、中国、ソ連の四か国首脳によって開かれたポツダム会談のさなか、トルーマンは原爆実験成功の報告を聞き、軍部は完成したばかりの二種類の原子爆弾の破壊力をテストする必要があると主張した。それで一発を広島に、違う種類の一発を長崎に落として、殺傷能力や人体に与える影響を実験した、という。

たぶん、どちらも当たっている。

日本政府の戦意をいかに喪失させるか、新型爆弾の威力をどのように測るかの二つの観点から、アメリカ軍は史上まれな、欺瞞的な手口を使った。それは日本軍の真珠湾奇襲攻撃をののしることができない以上に卑劣なものだった。そのことを、当時、呉海軍工廠に勤務していた若木重敏という技術大尉が、終戦後、執念をもって調べ上げた。

八月六日、午前七時過ぎ、一機のＢ―29が広島市の上空に飛来した。これはテニアン基地から先発した天候観測機「Ｅｓａｒｙ」（エザリー）号だった。原爆を積んだ「Ｅｎｏｌａ　Ｇａｙ」（エノラ・ゲイ）号は、それから一時間十分の後方を飛行している。

広島市では、エザリー号の飛来に対応して空襲警報が鳴り響いた。市民は朝食を放り投げて防空壕に非難した。七時三十一分、空襲警報が解除され、市民は朝食をそそくさ

と済ませ、出勤、通学に表に出た。
エノラ・ゲイ号は新浜沖上空に待機していた。
エザリー号から
「ヒロシマでは警報が解除された」
という通信を受け、原爆を投下した。
アメリカ軍はネバダ砂漠で行った実験で、原子爆弾は物陰に潜むものに対して直接的な大きなダメージを与えることができないことが分かっていた。いきなりエノラ・ゲイ号が接近したのでは、広島市民の多くが防空壕に避難してしまう。
そこでエザリー号を先発して市民を緊張させ、警報解除で安心し、かつ出勤や通学に気が急いたときを見計らって投弾した――というのである。
次いで八月九日には、「グレート・アーティスト」と名付けられたB―29が長崎の上空で二発目の原子爆弾を投下した。晴れ渡った空の下が地獄になった。

～～～～　補　注　～～～～

牛島　満　うしじま・みつる／１８８７～１９４５。鹿児島県に生まれ一九〇八年陸軍士官学校卒、一六年陸軍大学校卒。三六年歩兵第一連隊長として二・二六事件の処理に当たった。三七年歩兵第三十六旅団長として南京攻略戦に参加、三九年予科士官学校校長兼陸軍戸山学校校長、同年十二月第十一師団長、四一年満州・公主嶺学校校長、四二年陸軍士官学校校長を経て四四年八月八日第三十二軍司令官として沖縄に赴任した。

戦艦「大和」の撃沈　アメリカ海軍は潜水艦で魚雷攻撃することをミッチャー提督に進言したが、ミッチャーは「偉大な戦艦を潜水艦攻撃で沈めるのは軍人として忍びない」として航空機を発進させた――というエピソードがある。沈没したのは九州坊の津沖百五十キロの地点で、乗員二百五十六人が救出された。片道の燃料しか積んでいなかったという説には異説もある。

本土決戦　計画は四五年二月に立案され、想定戦場は「本土」と「朝鮮」に絞られた。配置する兵力は次のようだった。

・本土：師団四十三（うち満州から転用三）、独立混成旅団十六、戦車旅団六

・朝鮮：師団四、独立混成旅団一、低装備師団三

・総兵員：四十万人／馬匹：四十七万頭／自動車：一万二百台／輸送車両：七万台／兵站要員：百九十万人。

・「国民義勇隊」「国民戦闘隊」計二千八百万人。

・戦闘機八百七十機、高射砲一千二百門。

戦闘に使用可能な航空兵力は陸海合わせて一千五百機足らず、兵器の充足率は小銃が五〇％、軽機関銃が二三％、歩兵用火器が二八％という有様だった。

宮古・八重山の戦争　連合国軍の空爆と艦砲射撃によって宮古島で三千二百四十五人、八重山群島で六千百九人が死亡している。このうち四千人は石垣島守備隊を乗せた輸送船が撃沈したときの溺死者だった。

宮良長詳　みやら・ちょうしょう／１８９４～１９６５。八重山共和国大統領（八重山自治会会長）のあと八重山支庁長を務めた。

猿丸大夫の歌碑　新潟県東蒲原郡阿賀町鹿瀬の角神（つのがみ）ダム脇の公園にその歌を刻んだ石碑がある。

沖田信悦　おきた・しんえつ／１９４６～　：一九六九年明治大学を出て千葉県船橋市で古書籍商「鷹山堂」主人。著著に『千葉県古書籍商組合略史』（一九九六）、『琥珀色の彼方　鹿瀬町とハーモニカ長屋』（一九九七）などがある。

広島への原爆投下　二発の原子爆弾をサンフランシスコ港からテニアン基地まで運んだのはアメリカ海軍重巡洋艦「インディアナポリス」、「原子爆弾を落とした人」はポール・ティペッツ大佐（広島）、チャールス・ウィーニー少佐（長崎）、作戦を立案したのは太平洋戦略空軍参謀長だったカーチス・ルメー中将である。インディアナポリス号はテニアンからの帰路、日本海軍潜水艦「伊五八号」によって撃沈された

日本本土上陸作戦　「ダウンフォール作戦」と呼ばれ、七月七日に発動されていた。九州上陸を前提とする「オリンピック作戦」と、関東上陸を目指す「コロネット作戦」で構成されていた。オリンピック作戦は陸軍のマッカーサー将軍が、コロネット作戦は海軍のラムゼー提督が指揮を取る手はずだった。

若木重敏　わかぎ・しげとし／1916～2016。秋田高校から九州大学農学部及び京都大学理学部に進み海軍広島分遣研究所所長として特殊火薬類の研究に従事した。のち協和発酵工業（のち協和発酵キリン）副社長となった。「ユング・ホルツ」のペンネームで創作活動も行った。

日本IT書紀　072 火炎

著　者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
http://www.ossaj.org/
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。